

学校プールの安全な飛び込み

入水角度 30度以下に

都立高校で7月、3年の男子生徒(18)が体育の授業で水深の浅いプールに飛び込み、底に頭を打って首を骨折する重傷事故が起きた。同様の飛び込

み事故は、全国の学校で多発している。専門家は、学校プールで安全に飛び込むには、入水角度を30度以下にするのが安全の条件と指摘する。(細川暁子)

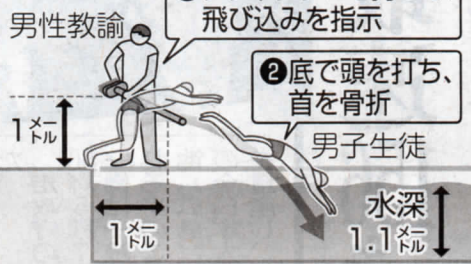
小中学校の授業では飛び込みは禁止されているが、高校の授業では段階的に指導するよう学習指導要領では定められている。生徒は三年になって初めて飛び込みの練習を行い、この日が五回目の授業。五回のうち教諭がデッキブラシを使って指導したのは、この日が初めてだった。

都教委の調査に対し、教諭は「目標を設定してデッ

事故は、指導歴二十年の男性体育教諭(四)が、デッキブラシを飛び越えてプールサイドから入水するよう生徒に指示した際に起きた

● 図参照。生徒は水深一・一メートルの底に頭を打ち付け、胸から下がまひする重傷を負い現在も入院している。プールは満水時には水深一・二メートルになる構造だが、学校側は「注水に時間がかかる」として水を減らしていた。

飛び込み事故が起きたときの状況



専門家「正しい指導法徹底を」

キブラシで位置を示した方が、飛び込みやすいと思っ

た」と説明。学校側は「危険な指導法だった」と認め

ており、生徒と保護者に謝罪した。

この事故について、整形外科医で、日本水泳連盟医事委員長を務める早稲田大スポーツ科学学術院の金岡

恒治教授は「デッキブラシを越えるために高く跳んで勢いづく分、底に頭をぶつけやすく非常に危険。入水角度は四五度を超えただろう」と分析する。

金岡教授は二〇一一年に、深さ四メートルのプールで、プールサイドから学生十一人にさまざまな角度で飛び込んでもらう実験を実施した。水面に対する体の入水

飛び込み事故 JSCによると、1998~2014年度の17年間に、全国の小中高校の体育と部活で起きた脊髄損傷の事故105件のうち、プールの飛び込みによる事故は26件(24%)で最多。水泳は夏季中心のシーズン種目にもかかわらず、通年で実施される器械体操21件、柔道18件、ラグビー17件よりも多かった。

首の骨の模型を示しながら、プールでの飛び込みによる脊髄損傷の危険性を説明する



角度が四五度の場合の平均到達水深は一・五メートル、三メートルを超えた学生もいた。入水角度が三〇度以下だと、水深が一メートルに達しにくいことも実験で判明したという。

日本水泳連盟が〇五年に作成したガイドラインによると、どんな飛び込み姿勢でも安全を保つ水深は三メートル以上。一方で、学校のプールは溺水防止のために水深一・三メートル以下のケースが多い。

金岡教授は「水深が浅い学校のプールでは、入水角度が三〇度以下で飛び込むことが絶対条件なのに、正しい指導法が徹底されていない」と強調する。

日本スポーツ振興センター(JSC)のスポーツ事故防止対策協議会委員として、飛び込み事故防止対策の啓発も行っている。「一人の教師が大勢の生徒を教える中で安全性を保つのは難しい。競技大会に出ないのであれば、飛び込み練習は不要。高校の水泳の授業の目的を明確にするべきだ」と指摘する。